

祈りと偽善について

第6章の前半で主イエスはファリサイ人らの偽善をとりあげ、神の国の住人とされたキリスト者がその生活と行為において偽りと欺瞞を避け、全てのことを見ておられる神の前に常に真実に生きることを教えられた。

まず2節以下、神の民の最も基本的な義務ともいうべき施し（愛の業）について語られた後、今度はもう一つの大切な宗教的行為としての祈りにおいて如何に偽善の罪が入り込んで来るかを指摘され、神の前に真実に祈り、誠実に生きることを教えられた。

祈りとは何か。ロイド・ジョーンズは次のように言っている。「人間について描き得る最高の情景は、神を待ち望んでひざまずいている姿である。この姿こそ人間の達しうる最高の到達点であり、最も尊い行動である。神との交わり、神と共にいる時以上に、人間が高貴になれる時はない」。確かに祈りは、神と一対一で対峙する厳粛な時であり信仰生活の真髄といていい。しかし、そのようなもっとも厳粛であるべき行為祈りの中に、罪が入り込むことを主イエスは指摘され、二つの警告を与えられた。

まず第1は、祈りにおける見せかけの罪（偽善）である。（施しの時におけると同様）「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる」（6:5）。これは当時のファリサイ人らの偽善的行為に対する警告であるが、祈りにおいて人の評価を気にしたり、敬虔さを装い人の関心を引き付けようとしたりする私たちの自己顕示欲に対する戒めの言葉でもある。

祈りは神の前における、神に対する語りかけであるがゆえに、常に真実と謙虚な心が求められる。神は「隠れたこと」をすべて見ておられるお方なのである。ルカ福音書第18章で主イエスが語られた譬えの中にあるように、神は、胸を張って美辞麗句をならべるファリサイ人の祈りではなく、遠く離れて立ち、目を天に向けることもできず、胸を打ちながら、ただ「神よ、罪人の私をお許してください」と祈った徴税人の単純ではあるが真実な叫びを聞き入れてくださるお方なのである（ルカ18:9～14）。

第2に主は、祈りにおける形式主義および人間中心主義に対して強く警告された。「あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ聞き入れられると思ひこんでいる。彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父（なる神）は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存知なのだ」（6:7, 8）。長く祈ることが、或いは言葉数が多くなること自体が異教的だというのではない。問題は、同じ言葉を繰り返し叫んで、神に波状攻撃をかけさえすれば、こちらの願うとおりに神が答えてくれるかのように考える人間の傲慢にある。

神は「隠れたことを見ておられるお方」であり、祈りはその神と一対一で向かい合うことである。そこでは見せかけは通用しない。そのような神の御前に入るにふさわしい祈りの人の衣は、恐れとおののき、真実と誠実である。詩編の記者が語っている通りである。「主はすべての道に正しく、そのすべてのみ業に恵み深く、すべて主を呼ぶ者、誠をもって主を呼ぶ者に主は近いのです。主はおのれを恐れる者の願いを満たし、その叫びを聞いて、これを救われます」（145:17～1/口語訳）。